

〈研究ノート〉

中国における劉思復(師復)研究の現在

川上哲正

一 現在の中国におけるアナキズム研究

アナキズムとは何か。例えばウドコックに従うならば、「(権威主義的)国家を、自由な個人の間、政治によらない形態に置きかえることを目的としている社会思想の一体系⁽¹⁾」と規定される。だが彼は、アナキズムの本質を探ることは「プロテウスと取り組もうとするようなもの」とも語っている。歴史的思想的にニヒリズムやテロリズムと交錯し、ときに同一視されたりもするアナキズム、この思想を扱うことの難しさを、ウドコックは、変幻自在なプロテウスとの取り組みにたとえたのである。

さて、現在の中国における思想史研究の場で、アナキズムはどのような解釈をほどこされ、どのような視角から研究の対象とされているのだろうか。

アナキズム、即ち無政府主義は中国において、二十世紀初頭、近代西欧思想の一潮流として受容され、マルクス主義との思想的対決

を経て、一九二〇年代後半には、その歴史的役割を終えたとされる。現在の中国ではマルクス主義に対する反動の思想とみなされ、レーニンらの定義づけを前提とする、いわば小ブルジョアジーの個人主義思想と解釈されている。従来、こうした解釈から批判的研究がなされてきたのだが、「实事求是」の精神に立って、中国近代思想史における状況的变化に対応した評価が下されるようになり、また一方、文化大革命におけるアナキスティックな思想的偏尪に向対する反省と重ねあわせて考察しようとする傾向もみられるようである。

蔣俊・李興芝「建国以来中国近代無政府主義思潮研究述評⁽²⁾」によれば、一九七八年十一期三中全会以後、一九五・六〇年代と異なる視点から研究の深化がはかられつつあると総括する。即ち、一九五〇年代末期にはマルクス主義受容の問題に対する関心から五四運動期のアナキズム研究が行われ、六〇年代に入って他国のアナキズムとの比較まで行われるに至ったが文化大革命の中で研究は停滞、七

○年代後半から再び、関係資料の発刊とあいまって、研究の範囲・視点の拡大がみられたとする。現在、アナキズム思想の受容から消滅まで、史実に即した研究が起こりつつあるがただ弱点は多く、「中外無政府主義思潮との関係、中国無政府主義の哲学的基礎、経済・文化・婦女・婚姻・家族方面に対する主張をも研究しなければならぬ」とする。

上述のような研究動向を示す例として、たとえば沈駿「中国早期無政府主義思潮初探」をとりあげる事ができる。沈論文では李大剣や毛沢東・惲代英らが青年時代にアナキズムの影響を受けたことを否定的に把えるべきではなく、彼らが「旧いもの」をのりこえマルクス主義者として脱却していったことに目を向けるべきだとする。こうした視点から、五四運動以後、アナキズムはマルクス主義に敵対するに至ったが、それ以前のアナキズムに対しては肯定・否定の両面から評価すべきであるとする。沈論文に従ってアナキズムの中国における史的過程を追うならば、一九世紀末、康有為の「大同書」にロシア革命前の暗殺事件がとりあげられたことを以て、アナキズム思想が中国に入ったとする。そして「民報」等革命派のジャーナリズムがアナキズムやロシア「虚無党」の影響を受けたのは、当時の歴史的現実の中で「一種の積極的の革命狂熱を激発して、即刻、現状を改変しようとはかったがゆえ」であるとする。ここでは、アナキズムを体系系をもつ社会政治思想としてよりも、一種の思想のカオスとして把える視点がある。辛亥革命後五四運動に至る時期についても、陳独秀や李大剣・蔡元培らのアナキズム的傾向を指摘している。そして「何らかの形式をもつ国家や政府に反対する宣伝」

によって袁世凱や軍閥の罪悪を提示することができたが、政治闘争に参加せず、反帝反軍閥の戦線から労働運動を離脱させた点を否定的に評価する。同様に「留法勤工儉学運動と工誼主義を提唱した」点を評価するが、マルクス主義の中国への伝播に妨害を加えたとの否定的評価を下してもいる。沈論文は、バランスのとれたアナキズム評価といえよう。

史実に即した評価が行われている一方で、非歴史的、政治的評価もなされている。李振亜「中国無政府主義の今昔」は「文化大革命中、林彪・四人組による煽動によって無政府主義が再度泛濫し、国家と人民に甚大な災難をもたらし、流毒は今も消えない」として、文化大革命の思想的脈絡の中にアナキズム的偏向を見出し、この立場から中国近代のアナキズム思潮を対象化する。即ち四人組の策動は社会主義の秩序を乱し、プロレタリア専制を破壊しようとする絶対的自由を希求したと断罪、それに重なるように中国近代のアナキズムを政治的に裁断するのである。

また、歴史的必然を標榜して、アナキズムの破産を承認する湯庭芬「試論無政府主義在中国的破産」⁶⁾は、従来の視点と同様にマルクス主義と中国革命の正道からアナキズム史を位置づけている。ここではマルクス主義理論の正統性と中国革命の方向性に背反したアナキズムの必然的破産が告げられるのである。

二 現在の中国における劉思復評価

劉思復は民国初年における中国アナキズムの中心的存在であり、中国国内にアナキズムを広める先駆的役割を果たした人物であるが、

中国では一九五・六〇年代殆ど論じられることがなかった。僅かに李維甫「一九二一年以前広東無政府主義者の活動」があり、辛亥革命後の軍閥政治の時代、アナキズムを主体的に選びとり、個人的アナキズムから無政府共產主義へと思想的成長を遂げた人物と評価されているが、彼の思想の分析までたはいてはいない。

今日、劉思復の思想と行動に言及した論文が提出されつつあり、前述の蔣・李論文に従えば、徐善広「評辛亥革命時期劉師復の無政府主義」では「中国資産階級民主革命に対する反動」とみなし、李喜所「略論民国初年の社会主義思潮」では「社会主義の真理を求め先駆者たることを失わない」とし、張磊・余炎光「論劉師復」では、社会主義の啓蒙を行なったことで、新文化運動に繋げる啓蒙作用を果したとみなされる。こうした三例を挙げることによって、蔣・李論文は孫文らのブルジョア民主革命派と背反した者はすべて消極的、反動的とみなされるのかどうか、アナキズムが本質的に民主主義か社会主義か、科学的社会主義の傳播に啓蒙作用をなしたのかどうか、検討する必要を説いている。これらの課題をとりあげ、辛亥革命から五四運動への思想的展開の中に劉思復の思想と行動を位置づけようとするのである。

さて、ここでは筆者が触れることの出来た劉思復評価を少しく紹介、検討したい。

(一)孫茂生「中国無政府派的政治思想」

袁世凱による専制・独裁・災難が小ブルジョア知識人に政権を厭悪する消極的感情をよびおこさせ、アナキズム傳播にとって良質の土壌を提供したとの情況分析の後、劉思復らのアナキズムは無政府

個人主義、アナルコ・サンディカリズム（工団主義）、無政府共產主義の三流派にわたっていたとする。

さて、彼の政治思想はどのように批判されたか。「一切の強権に反対し絶対自由を主張した」ことに關して、次の三点を指摘する。

(1)劉は抽象的人性から出發して「互助」を人類が自然にもつ感情とみなしており、階級対立の存在する社会を理解せず、「互助」とは階級調和の一形式にすぎない。

(2)国家は強権とみなし、国家を歴史的産物とせず、国家が階級性をもつことを理解しない。しかも、英雄史觀に対する熱狂的崇拜者である。

(3)政府を強権の母として絶対自由を主張し、国家や政府に対する具体的分析をなさず、孫文と袁世凱を同一視する誤りをおかした。同様に「恐怖暗殺と同盟罷工を鼓吹した」ことに關しては、前者があくまで特定の歴史条件の下での革命の補助手段にすぎないことを理解せず、後者がストライキによって地主・資本家政権を打倒できるなどとする夢想にすぎないと批判する。更に「個人の品德修養を唱導し、社会的悪習・流俗に抵抗した」ことに關しても、革命の担い手たるべき青年を政治から離脱させ、現実の階級闘争から逃避させたとみなした。かくて、劉思復の政治思想は「中国小ブルジョアの辛亥革命に対する失望と軍閥に対する痛恨を反映した」ものと結論づけられている。ここには、マルクス・レーニン主義の高みからなされた正統的批判があるばかりである。

(二)張磊・余炎光「論劉師復」

劉思復が旧民主主義革命期における最も傑出したアナキストであ

ったとして、彼の生涯をあとづけ、アナキストとして宣伝活動を行なう以前の思想とアナキストとしての彼の思想とを検証している。とりわけ、辛亥革命後、アナキストとして積極的に活動する以前の思想を取上げている点は新鮮であるが、いまここでは、この段階の思想を孫文の三民主義に一致するものであったと指摘していることに止めておく。そのように位置づけるがゆえに、辛亥革命後の苛酷な政治情況が、獄中、虚無主義に傾いていた劉思復をして民主主義からアナキズムへの転回を促したとする。劉思復のアナキズム思想に関しては、バクーニン、クロポトキン思想の混合物とみなし、実践においては「伝播」、すなわち宣伝を第一の手段としたとする。

これによって、劉の思想活動がマルクス主義受容以前の思想情況の下で社会主義を啓蒙した点に肯定的評価を下し、新文化運動への促進作用をなしたとする。しかしながら劉の理論はマルクス・レーニン主義の立場からすれば、国家・社会観において小ブルジョアジー独特の空想性を露呈し、マルクス主義の中国への普及に対する反動をもたらしたと結論づけている。

(三) 胡繩武・金冲及「二十世紀初的中国無政府主義思潮」⁽¹²⁾

劉思復のアナキズム思想はクロポトキンとトルストイの影響が大きいとみなすが、思想の深刻さ獨創性において辛亥革命以前のアナキストに及ばず、何ら新しい展開を示していないとする。劉思復らにとっては反清革命から軍閥統治批判に闘争目標が変化しただけであって、当時の中国における歴史的現実とときり結んだ思想を提出しえていないとする。そればかりか、マルクス主義受容の問題からするならば、妨害を行なったとみなす。

以上、三例をあげたにすぎないが、ほぼ現在における中国の劉思復評価を概観した。これらは相互に対立的であるというよりは補充しあっているといえるわけで、劉思復の行動と思想をとりあげる問題関心の深さに対応した結論を導き出している。

三 辛亥前における劉思復の思想

アナキスト劉思復が「晦鳴録」や「民声」によって展開した思想活動については周知のことであるが、彼がアナキストとして活動する以前の思想については従来、言及されることはなかった。同盟会員として、テロリストとしての事跡によって、彼の思想的立場を推測するしかなかったのである。しかし張磊・余焱光の「論劉師復」は、鄭佩剛の「師復伝」「師復年譜」(手稿)や『香山循報』に掲載された論稿を手がかりとして、下獄時代の彼の思想に関する検討を試みている。ここにおいて劉思復の思想的展開をより事実在即して探究することが可能となった。

では張・余論文は辛亥以前の劉思復の思想をどう扱えたのであろうか。既に述べたように、張・余論文では「民族主義と民主共和国観念を伝え、清廷の(偽)立憲を暴露し、保皇派の謬論と封建儒子への反駁」を行なったと集約され、基本的には孫文の三民主義及び同盟会の政治綱領に符合するといふ。

まず、劉思復は反滿を支柱とする民族主義者であったとされる。中国を亡国に導き、漢民族を圧迫する清朝は、たとえ滿漢通婚など改良的詔を發布したとはいえ、実体は変わらず、「最も重要な軍政は更に悉く親貴に操らせ」「立憲的裏面」にており、「國民たる者、ま

さに大いに六師を張り、以て光復を図るべし」(「民族与国土」と主張する。こうした反滿の立場のみならず、植民地主義の鎖を打破し、亡国を救済しようとする反帝的側面も見出される。即ち「近世帝國主義の貪暴、殖民政策の狠毒は陸海軍商工業を動かし、人と国家を亡ぼす」(「寒柏齋臆言」)ものだから、「恥を知り」(「民族の気節」(同前))を鍊磨して外国崇拜に反対すべきであると主張する。ただ必ずしも反帝の要求と政綱とが明確化されたわけではなく、しかも辛亥革命期の革命派に共通する大漢民族主義的傾向が根強く存在するという。その根柢は漢民族のもつ「神明の遺制」「前代の典章文物」(「淨慧室隨筆」)を無批判に賛美するため、少数民族、とりわけ滿州族の歴史的位と作用とを抹殺、「大漢の天声を振う」(「香山循報發刊詞」)べしとしたことにある。劉思復の民族主義は当時の革命派の共有する危機意識を反映していたという。

民主主義思想をめぐっては、これまた、自由平等觀念を宣伝して封建的專制主義に反対する立場であったと扱えられる。いま中国は「人々が平等で、権利と義務がみな均しい」(「民族平等觀念之發達」)文明国ではなく、「門閥が互いにひきあい、階級が歴然としてゐる」野蠻国であり、皇帝權力が絶対で、「國民の權利が日々に減少してゐる」(「立憲之裏面」)情況にある。しかも政治的のみならず社会的にも封建的遺習が行われ、女権は抑制され、蛋民や墮民、家樸が存在する。こうした情況把握がなされてはいるが、劉思復の民主主義はブルジョア民主主義の枠内に止まり、人民大衆を解放する思想たりえていないという。

儒家思想批判に関しては、劉思復の批判がそれほど深刻なもので

ないとしながらも、改良派の孔子頭賞への対応を表現しており、儒学の絶対化を批判したとする。即ち儒家が歴代の皇帝に利用され、「虚名に務め、禄位を嘗む」(「民族平等觀念之發達」)道具となったことで、「學術の由る所、日に隘く」(同前)なり、學術の發展を束縛した点を批判。また「夫れ経は古の典籍なり。歴史あり、政書あり、文學あり、……概して経と名づけるべきではなく、経を一切の典籍の上に置くべきでもない」(同前)として、儒学による学問の秩序化を批判したとする。

更に清朝の預備立憲、康有為批判にも言及している。劉思復は預備立憲が革命への勢を抑制するための「表面は立憲にして裏面は專制」(同前)の政策であることを看破した。また康有為思想が「聖經をこなごなにし、仏語を剽窃し、西歐哲学政治や公羊三世の説を取って附会した」(同前)ものとみなす。しかしながらこれらの批判は必ずしも政治的理想的現実に立脚したかたちで明らかにしえておらず、いわば感想の域に止っているとされる。

以上、張・余論文に準拠しつつ、劉思復がアナキストとして活動する以前、「香山循報」誌上における彼の思想を紹介した。獄中にあつた劉思復の思想は確かに三民主義的ともいふべき傾向を示しているが、体系的をもつたかたちでは表現されていない。張・余論文は「民主主義の範疇に属し、孫文の唱へた三民主義に大体一致し、同盟会の政綱と基本的に符合した」ものであるとする。しかし、これらの論稿が書かれた一九〇八・九年、つまり彼が香山監獄に入獄していた時期、彼の自伝に従うならば「入獄兩年余、種々の刺激と研究を経て余の思想は一変した」とある。もしそうであるならば、

彼の著述自体にアナキズムの影が帯びるはずであるが、上述の紹介をみる限り、首肯できない。張・余論文では引用された著述の製作年月が記されていないために、思想的变化をあとづけることはできず、一括して、「三民主義に大体一致」するとみなされるのである。そして、むしろ、獄中、既に虚無主義に染まりつつあった彼が、アナキズムへと思想的転回を遂げた根拠を、辛亥革命後における袁世凱政權の独裁へと移行する政治的現実への絶望に求めている。おそらくここでは、劉思復のアナキズム思想の展開の問題、即ち個人主義的アナキズムから無政府共產主義へと発展・変化した過程が問われるべきであろうが、いまは明らかにしえない。

ところで劉思復が獄中から投稿した「香山循報」は、一九〇八年八月、鄭岸父らが香山県石岐において発刊したものである。もともと「香山旬報」と命名されたが、「香山循報」と名を改め、辛亥革命後、「香山新報」となり、二次革命の失敗後、竜濟光により封鎖された。その間、一二期、四四年間にわたって発行されたという。その「発刊辞」は劉思復の手になるものである。⁽¹⁵⁾

中華開国四千六百有六年。歳は戊申八月二十一日。我が香山旬報出世す。本報同人「小雅」の尽く廢れて而も中国の亡ぶのを懼れ、咸大悲を抱き、無辺の弘願を發し、邦人士女をして真智を払拭して咸旧染を革め、化を興し俗を厲まして、我が民氣を作し、因りて以て自由を回復し、大漢の天声を振り、我が邑人の耿光を發揚し、中土を被washめんと欲するが為に、乃ち勸勉して斯の報を作る。海潮の音を掲げ、民の道鐸と為す。美満光大にして、將に今より始めん。我が先民、陳天覺・馬南宝諸公在天の靈、実に式に

之れ凭る。嗚呼！風雨は晦の如く鷄鳴は已まらず。凡そ我が仁、良、隆、黃梁、所、得、四大、黃圃、恭、常、谷、穰、旗十三、すべて五十万諸父老、昆弟、姉妹、庶くは奔走して偕に來り、我が法音を聴きて怖ることなかれ！

ここには民族主義を宣揚する劉思復があるばかりである。彼が反滿革命を担う民族主義者としての自己を転回させ、民族主義からアナキズムへと思想の座標軸を移したのはどのような過程を経てのことなのか、いまは断定しえないのである。

注

(1) G・ウドコック『アナキズムI』（白井厚訳、一九六八、紀伊国屋書店）。

(2) レーニン「社会主義と無政府主義」（一九〇五）では「社会主義と無政府主義とのあいだには深淵とも言うべきものがある。挑発する密偵や反動諸政府の新聞紙上の召使どもはそれを存在しないもののように述べようと試みているが、それはむだなことである。無政府主義者の世界観は、裏返しにしたブルジョア世界観である。彼らの個人主義的理論、彼らの個人主義的理想は、社会主義とは正反対である」（『レーニン全集』第十巻、大月書店）とあるが、この部分に依拠して、マルクス主義からのアナキズム評価を下す例が最も多い。

(3) 『近代史研究』（一九八五、第四期）。

(4) 『華中師院学報』哲社版（一九八三、第三期）。

(5) 『南開学報』（一九八〇、第一期）。

(6) 『華中師院学報』（一九八三、第四期）。なお、湯涯芬「五四時期無政府主義的派別及分化」（『華中師院学報』一九八一、第三期）は、アナキズム運動の分化と転落を追認する。

(7) 『理論与实践』（一九五八）。

- (8) 『武漢師範學報』(一九八一、第三期)未確認。
- (9) 『北方論叢』(一九八三、第六期)。民国初年の社会主義は孫文の民生主義と結合したり、アナキズムと結合したり、「工団福利主義」(サンディカリズム)と結合したことを指摘し、無政府共產主義同志社や心社を「辛亥革命中の極(左)派、民国初年の理想派」とみなし、民国成立後社会に進歩なく、人民が苦しみを受けている現実の中で、「無政府主義を(体)とし、科学的社會主義を(用)とする」アナキズムが出現したと述べる。
- (10) 『近代中国人物』(一九八三・八、中国社会科学出版社)。
- (11) 『求是月刊』(一九八一・四)。
- (12) 『從辛亥革命到五四運動』(一九八三・十一、湖南人民出版社)。胡・金論文は「天義」「新世紀」の思想内容に関する分析を中心にすえたものであり、辛亥革命前後のアナキズムに対して積極的評価を下している。
- (13) 以下、『香山循報』に掲載された劉思復の著作について、殆ど実見できず、張・余論文に引用されたものを転載した。尚、劉思復の著作のうち、「香山循報発刊之詞」は、鄭佩剛「香山循報及其創辦人鄭岸父」に転載されたものみ見ることができた。鄭論文によるならば、「民族与国土」は内外の民族・國家發展の歴史を科学的に分析し、反清を否定する奴隸思想、つまりは立憲派の思想を排斥したものであるという。また「立憲之裏面」は預備立憲を批判したものであって、「滿漢平等は実行できない」「言論出版集會の自由を禁制する」「孔教を尊崇するのは信仰の自由を剝奪することである」との三点から批判がなされたという。
- (14) 「駁江亢虎」(『民声』第十四号)。
- (15) 鄭佩剛「香山句讀及其創辦人鄭岸父」
- (追記)劉思復の伝記について、従来、彼の自述である「駁江亢虎」の他、馮自由「心社創作人劉思復」、顧父「師復君行略」、文定「師復先生伝」などがあるが、張・余「論劉師復」には鄭佩剛「師復伝」「師復年譜」に

依拠した事実があげられている。鄭佩剛は劉思復の妹を妻として、いわば義弟であり、彼を記念すること深い人物である。辛亥革命前の劉思復の伝記について、疑問点とともに補足しておきたい。

(1) 劉思復の原名は紹彬、字は子麟、原名は紹元。日本留学に際して思復と名乗り、のち、師復と改名した。

(2) 一九〇一年、郷試落第後、譚嗣同の「仁学」に共鳴し、演説社を設立する。一九〇四年の留日時期、幸徳秋水の著作が彼に深い影響を与えたところがあるが、疑問。

(3) 一九〇五年末、帰国して「東方報」編集のかたわら、石岐に勇徳女学を創設、武峰閣報社を創立するところがあるが、帰国を「一九〇六年春」とするものが多く、疑問。

尚、楊天石「師復」(『民国人物伝』第四卷、一九八四)なる伝記も書かれているが、内容的に新事実はない。

脱稿後、嵯峨隆「最近の中国におけるアナキズム研究の動向」(『アジア経済』一九八四・十一)があることを知った。嵯峨論文では最近の中国におけるアナキズム研究は、「(実事求是)の方針の産物に関連する」成果を生んでいるが、一方、「現政権の政策の正当化という政治的要請をも反映するもの」として、「二つの相矛盾する側面」をもつとする。また劉思復評価に関して、徐善広「評辛亥革命時期劉師復の無政府主義」及び楊才玉「評民国初年の無政府主義思潮」(『學術月刊』一九八三、第二期)を取り上げ、ともに「孫文の革命路線を正統とする立場」から裁断したものとし、後者については、「劉師復らの主張はブルジョア革命を腐蝕、瓦解させる作用を持っていた」との結論を紹介している。